

---

# Blue Eyes Marionette

夜深 紅恋葉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Blue Eyes Marionette

### 【Nコード】

N0071H

### 【作者名】

夜深 紅恋葉

### 【あらすじ】

父親の再婚相手である血のつながらない継母とその息子である義兄から、奴隷のように扱われて屋根裏部屋に暮らしている少年・レイン。彼の唯一心を許せる存在は、亡くなった母親が、逝ってしまった前の最後のレインの誕生日にプレゼントしてくれた人形のアリスだけだった。ある日レインは毎日の辛さから自殺を図ろうとしたが、突然現れた少女にそれを止められて…。

ねえ今日も、君は蒼い瞳を僕だけに向けらんだね。  
ずつと僕だけの想いを見続けているの？

僕にも君の声が届けばいいのに。

君の想いが僕には見えないから、とてもとても哀しいんだ。  
とてもとても、淋しい。

+++++

「レイン！レインはどこじゃー！！」  
僕を呼ぶ声がある。

「はい、こちらにー・・・」  
「何をしていたのだ、お前に休憩などないのだぞ？」

「わかっております、母上様。」

「わかっておるなら早く掃除をしておしまい、まったく使えない奴隷だこと。」

母上様は僕のことには奴隷としか見ていない。それは、僕が物心ついて以来ずつとだから、もう慣れた。

「どうかお許しを！母上様っ」

「ふん、私はお前のようなガキが大嫌いじゃ。お前と来たら何をやらせても役立たず、口答えなどするでない。これは正当な罰じゃ。」

そう言っつて、僕にひたすら鞭を振るう。これも日常。

僕は毎日耐えるだけ、いつかここを出られる日がくるときまで。

僕はこの国で生まれ育った父様と、日本で生まれ育った母様の間にできた子供だ。

だけど病弱だった母様は、僕がまだ幼い頃に亡くなった。

父様が母様の死後、再婚した相手が母国の女性。

父様は今は仕事であり家によりつかないから、僕はすっかり新たな母上様とその息子である兄上様達の玩具状態だ。僕の私物などほとんど取り上げられて、僕はこの家では一人の人間としても認められていないのだろう。

一日中下僕として働いて、自分の部屋として与えられた屋根裏部屋に戻るのはいつも深夜零時少し前といったところだ。

「ねえアリス、僕、今日もちゃんと奴隷を演じられていたかな？」

唯一取り上げられなかった、ずっと昔から大事にしているアリスと名付けた人形に僕は話しかける。もちろん人形なんだから、答えてもらえるわけじゃないのはわかってはいるけれど、僕にとってアリスは唯一僕が存在を認めてくれているような気になれる相手だったから。

「・・・アリス、あと何日耐えればいいのか、僕。」

慣れただなんて、そんなの虚勢だ。

僕はずっとずっと苦しい。ただそれを認めたくないだけで。

本当は一秒でも早くここを飛び出したい。けれど僕はまだ子供で、何のスキルもなくて。

「ねえ、答えてよ、アリス・・・っ。僕一人ぼっちはもう嫌なんだ・・・っ」

僕をここから連れ出してくれる存在を今か今かと待ち構えて、もう何年だろう。そんなのいないってわかってるのに。

こんな毎日なんてもうたくさんだ。

僕は誰かのおもちゃでもなければ奴隷でもない。

それが叶わないならいつそ・・・。

僕はポケットから携帯ナイフを取り出す。

「一緒に眠りにつこう、アリス。」

そのときの僕はたぶん、もうすぐこの闇が終わるといふ開放感に似た感情で満たされていた。そして僕は死の世界でアリスといっぱ

い話そうと決めた。

大丈夫、一瞬だけ、ほんの一瞬だけ痛みが襲うだけ。

そのあとはきつとあたたかい世界に行ける。アリスと一緒に。

ナイフを自分の首筋にあてると、ひんやりとした。ナイフ特有の冷たさだ。

僕は目を閉じる。

さよなら、父様。

僕は今、母様のところへアリスと旅立ちます。

深夜零時を告げる鐘の音が遠くで響いた。

+++++

「ちょっと！こんな目の前で死なれたら後味悪いじゃない。」

僕は突然聴こえた、聞き覚えのない声に、ついナイフを落としてしまう。

おかしい、この部屋には僕と人形のアリスしかいないはずだ。けれど今はつきりと聞こえた。

「聴いているの!？」

ぼんやりしている僕の視界いつぱいに、蒼い瞳の金髪の女の子の顔があった。

「……え……?」

僕はあまりにびっくりして、後ずさる。なぜ初対面の女の子が僕の部屋にいるんだ?

「あの……君は……」

「あなた失礼ね。自分が名乗らずにレディにいきなり名前を訊くなんて紳士じゃないわよ。」

「なっ、失礼なのはそっちだろう！？ここは仮にも僕の部屋だ！どつから侵入したんだよ！」

むっとして僕はつい切れそうになる。

「あら、心外だわ。私は最初からこの部屋にいたのに。それともわからない？」

私の姿をよく見なさいとでも言うように、彼女は着ているワンピースの裾を持ち上げる。

金髪ストレートに蒼い瞳、そしてどこかで見たとあるようなワンピースドレス。

そう、それは僕がこの部屋で毎日のように見ていた少女そのもの。

「・・・アリス・・・？ アリスなのか・・・？」

まさかとは思ったけれど、僕は確認してみる。

「そうよ、見ればわかるでしょう？」

いやいやいや、わかんないって。

アリスは人形だ。人間じゃない。そのアリスが今ここに人間の女の子として立っている。

僕と同じ年くらいの姿で・・・。

「それよりレイン！ホントあなたたって情けないのね。この数年間ずっとあなたを見てきたけれど、いつもウジウジ卑屈な考えしかしないで・・・。ここから飛び出したいなら、死ぬよりもっといい方法があること、どうしてわからないのよ。」

「え・・・ア・・・アリス・・・??」

アリスは想像以上にキツイ性格をしている。もっとうとう、可憐でおしとやかなイメージだったのだけど。本当にアリスだろうか。僕の人形のことを知った兄上様達が似てる女の子をつれてきて僕をからかっているんじゃないかと疑いたくなくなってしまっただ。

だがその考えはすぐに打ち消されることとなる。

「さ、荷物をまとめなさい。行くわよ。」

「あ、あ・・・行くって何処へ・・・？」

アリスはそれまで釣り上げていた眉を緩めると、一言こう言った。

「ここから出たいのでしょうか？ 私があなたを連れ出すわ」  
微笑んだアリスはすつごく可愛くて、つい見とれてしまう。

「それに、私だってこんな埃っぽいところ、もうウンザリなのよ。」  
あ、そっちが本音ですか。

「でも出たつてのたれ死ぬのがオチだよ、僕はまだ子供だし、一人で生きていくなんて無理だ」

今までだって、そう思ったから出るにすらなかった。

「あー、もう、すぐそうやってウジウジ卑屈になんないでよね！いいこと？あなたはここから出たいんでしょ？だったらその先のことなんて、出てから考えればいいのよ。だいたい、強い意志があれば子供だってけっこうなんとかなるもんよ、いざとなったらね。」

アリスは人形だったわりに、悟ったような話しぶりだ。

「それに・・・」

「え？」

「もう一人じゃないでしょ、私がいるわ」

ああ、やっぱり笑顔のアリスはとても美しい。

僕はアリスを信じてもいい気がした。僕はまだ子供で何にもできないけれど、アリスがいてくれるなら、なんでも出来るんじゃないかって思えてくる。

僕はたいしてない荷物と、ずっと使わずにとっておいた母が僕に残したお金を鞆にしまう。

これで二度とここに帰ることはないかもしれない。けれど、僕は僕だけの居場所を探しに行こう。

アリスと一緒に。

「さ、行きましょう？」

アリスが屋根へと上がれる梯子の前に立って、僕に手を差し伸べる。

「え、ちょっとまって、どこから出る気なの？」

「あなたこそ玄関からまっとうに出ていく気？」

「だって、この三階建ての屋根からじゃどうやっても無理だよ?」

「夜中とはいえ、私をこの家の人に見られたらいろいろまずいし、あなただって出るどころじゃなくなるわよ。」

「でもそれこそ怪我しちゃうよ」

三階の屋根から地上へ?無理だ。下手したら死ぬ高さだろう。

「あー・・・もう!つべこべ言わないでちょうだい。言ったでしょ?なんとかなるって思えばなんとでもなるって。行くわよ」

アリスはけっこう短気だ。そしてこうと決めたら意思は固い。優柔不断な僕とは大違い。

けれど、だからこそ僕は彼女に憧れる。

屋根に上がったものの、やっぱり地上まではものすごい高さだ。とても降りれる気がしない。

「ばかね、誰もここから直接飛び降りるなんて言っていないでしょ。」

「じゃあどうするの?」

「あの木」

そう言っただけアリスが指さすのは、屋根から少しだけ離れた場所にある、庭に植えてある大木だ。

「あの木まで乗り移れば、怪我するリスクを減らせると思うの。」  
理論上、可能だろう。

でも、リスクは残る。木まで乗り移る時に失敗すればやはり落下しかない。

「...怖い?」

アリスは僕を覗きこむように見つめた。

「...うん、怖い。」

僕は正直に伝える。落下したらけがをすることより、そうなら二度と外出なんてさせてもらえないかもしれないかもしれないという恐怖だ。

アリスはそんな僕の手をそっと握ってくれた。

「え・・・?」

「私を信じて？強い意思是、運命をも変えるの」

蒼いまつすぐな瞳が僕だけを映す。

握ってくれた手が優しく強くて、僕はアリスの言葉を信じると、心の中で誓った。

僕はこの監獄みたいな闇から抜け出す。

未来に待っているのが希望か絶望かわからないけれど、何もしないでいたら何も変わらない、アリスはそう言いたいんだよね？

だから僕は今翔ぶよ、この場所から。

自然に体が軽くなる。

木までの距離さえ縮まったような気がして・・・僕は屋根から飛んだ。

+++++

「・・・父様、心配するかな。」

僕ら二人は汽車に揺られている。

なんとか母上様や兄上様に気づかれることなく家を出て、アリスと駅に向かって歩いたのが深夜二時頃。駅は近くないから着いたのが明け方四時前くらいだ。それから始発を待つてアリスの示した電車に乗って今に至る。

「気になるの？」

車窓からの景色をかなり真剣に見ていたアリスだったが、僕の話はちゃんと聞いていたらしい。

「そりゃあ、書き置きも何もせずに出てきちゃったし。」

「書き置きなんて、心残りのある人間だけがするものよ。それともあの家に心残りがあある？」

そうだ。心配もしなければ助けてもくれなかった父親にはもう期待しないと決めたから出てきた。

「うづん、やっぱり今の忘れて。」

心配してほしいという願望は捨てなくては、今この行動に意味などなくなってしまう。

すべて棄てる覚悟で出てきたということ、胸に刻んでおかなければ。

「ところでこの列車、どこへ向かってるの？」

アリスは迷いもせずこの列車を示したけれど、アリスの中ではそれなりに目的地があるのだろうか。

アリスはなぜか小さなため息について僕をちらりと見ると一言こつ言った。

「国際空港よ。」

「……………は？」

あの…………アリスさん？何を考えて…………

「あなたのもう一つの祖国へ行くの、パスポートはあるのでしょうか？」

「そりゃあ前に日本に行ったことあるし、パスポートも持ってきてるけれど、日本に行ったって母様はいないじゃないか。」

アリスだって知っているはずだ、ずっと見ていたのなら。

「でもお墓は日本でしょ、あなたのお母様の。お墓の場所なら私だって知っているし、まずはお墓参りしましょう？」

そう、母様の墓は、母様の家族という人がどうしても言って日本のお墓に入れることになったのだ。その母様の家族という人と会ったのはそれが最初で最後で、もう顔も名前も覚えていないけれど。そしてその墓地がいったい何処だったのか、僕は記憶できていない。

「どうしてアリスが知っているの？」

「どうしてじゃないわよ、あなたに抱かれて一緒にその場にいたんだから。」

人形って記憶能力もあるのか。しかも僕より絶対正確そうだ。

「それで？」

「それでって？」

「お墓参りしたあとはどうするの？」

「特に何も決めていないけれど。」

「そこまで考えてた割に後はノープランとは。」

「もう、そんな顔しないでよ。言ったでしょ？」

僕が不安そうな顔をしたものだから、アリスはまた呆れ気味だ。でも言わんとしたことはすぐに解って。

「なんとなくなるって思えば、なんともなる。」

見事に僕とアリスの言葉は重なった。

「わかつてるんじゃない。」

「アリスの信念なんでしょ？」

僕がそう言っているとアリスはちよつとだけ照れたように赤くなった。

「ああ、そうそう、悪いけれど私はこれから人形に戻るから鞆に入れてちょうだい。」

空港に着いた途端、アリスはそう言う。

「ええっ！？何言ってるんだよ？」

当然隣にアリスが乗るものだ・・・。

「まさかアリス、飛行機が怖いとか？ アリスにも苦手なものとかあるんだー？」

強気でしつかりした女の子だったアリスの弱点発見したと思っただけからかおうとしてしまったのだけれど。

「私は籍のない存在よ、パスポートとれないんだから、人形の姿になるしか術ないじゃない。」

「どうやら、やっぱり弱点はないらしい。」

たしかにアリスは人形だ。どうして人間になれるのか、まったくわからないけれど、人形なのだ。パスポートなど発行してもらえないはずがない。

人目のつかない場所で人形に戻ったアリスを鞆に入れると、やっぱりただの美しい人形にしか見えない。今まで観てきたものが幻想

かと思つてしまつくらいに。

アリスに事細かに教えてもらったことを思い出しながら、飛行機に搭乗して、シートに座る。眠つたり機内食を食べたりして、ようやく日本の空港に着いた頃には時差の関係からか昼間だった。

「アリス、もう人間になつても大丈夫だよ。」

日本の空港から行きたい墓場までの道のりなどわからない僕は、人の来なさそうな場所でアリスにそう告げる。

「・・・」

しかし反応がない。アリスは人形のままだ。

人形から人間になるのつて、何かきつかけがあるのかな。昨日アリスが人間になったとき、僕は死のうとしていたっけ。

となると、僕が死のうとしないとアリスは人形のままなのでは？だとするとアリスは二度と人間になれないんじゃない。

考えてもわからないことを悶々と考えて、でもいつまでも空港にいるのもなんだったし、僕はなんとなく空港から出ている電車に乗ることにした。

電車は海の町から海沿いの町へ、さらに少しずつ家の多い町へと、おそろくどちらかといえば都心に向かつて走っているようだった。

日本時間でもうすぐ昼十二時という頃、僕は車窓から教会を見つけて、次の駅で降りてみた。どのみちアリスは目覚めそうもないし・・・もしかしたら眠っているだけかもって思つたら起きるまでしばらく放つておいた方がいい気がして・・・、少しくらい寄り道してもいいだろう。第一僕は墓地を知らないんだから。

「わあっ」

森の中の教会はとても神聖な空気を放っているようだった。

周辺の地域一帯を、誰も穢すことのできないオーラで埋め尽くすような。

父様の信仰がキリスト教だったからか、やっぱり教会はなんとなく落ち着く。

アリスを片手に抱いて、片手に鞆を持った状態のまま、僕は建物内に入るうと歩き進めて・・・。

ちょうど建物の近くまで来たとき、大時計の針がガチャリと音を立てたかと思うと、昼の12時を告げる鐘が鳴り響いた。

突如、人形のアリスから光が放たれて、彼女の身体が人間化する。光の中で、刹那一糸纏わぬ姿になる。まるでそれは女神のように美しいものだった。

初めて目の当たりにする人形の人間化の瞬間。頭では理解していたものの、今ここでようやくアリスの存在が確かなものだとして感じた瞬間だった。

「レイン？」

つい我を忘れていた。

アリスにそう問われてはつとする。

「あ、ああ、ごめん。初めて人間になるとこ見たから・・・」

「そうだったわね、私も時差のこと忘れていたのよ。漠然と空港着いたくらいに人間になれる瞬間が来る気がしていたわ。」

なんとなくお互いにタイムラグが邪魔をして会話が成立していないような感じがした。

「タイミングがあるんだね。僕二度と君に会えなくなるんじゃないかと思つて・・・」

「大丈夫よ、私は特別な人形だもの。」

アリスはそう言いながらも、どこか悲しそうに見えたのは気のせいだっただろうか。次の瞬間に見た彼女の表情はなんてことなかった。

「それより、墓地の場所覚えていたの？」

「へ？」

「ああ、なんだ、たまたまなのね。ここ、墓地にかなり近いのよ。教会ではないけれど、この近くのお寺よ。」

「そうなの!？」

「ええ、だから早く行きましょう。教会ならいつでも来られるですよ?」

「そうだ。まずは母様に会わないと。」

アリスの言うとおり、本当にそのお寺は教会の敷地からかなり近い場所にあった。

「どれだろう、母様のお墓…。アリス知ってる?」

墓地の場所を覚えていたくらいだ。もしかしたら母様の墓の位置も、なんて期待したけれど。

「あら、たいした数じゃないもの、一個ずつ探せばすぐ見つかるわよ。名前はわかっているんだし。」

「だ、そうだ。」

さすがのアリスも母様の墓の位置までは覚えていなかったらしい。

「あ、レイン、これじゃないかしら?」

二人で手分けして母様の墓を探していたのだけど、ほどなくしてアリスがそう言った。アリスが指さしたその墓には確かに母様の旧姓の名前が入っている。

…ここに、母様が眠っている…。

そう思ったら、途端に胸に込み上げるものがあった。

「レイン!？」

僕は涙が止まらなくなっていた。

アリスと一緒にだったとはいえ、家を出て、遠くの地まで来て、僕は心のどこかで不安だったのかもしれない。それが今、母様の生きた証を目の前にして、とても安心したような気持ちだ。

「…レイン…。そうよね、あなたのたった一人の味方だったんだものね、幼いころから。」

僕は、まだ母様が生きていた頃から、父様にはあまり良く思われていなかったことは勘付いていた。だけど、母様は僕をちゃんと見ていてくれた。本当の僕をちゃんと。

アリスも母様が僕の誕生日にくれたものだった。母様が逝ってしまふ前の最後の僕の誕生日、きつと母様は自分がもう長くないことを悟って、アリスを贈ってくれたのだろう。自分の代わりに僕を見ていてくれる存在を与えるかのように。

「もう、あなたの存在を否定する人は誰もいないわ。」  
アリスは僕の肩をそつと抱いた。

「あなたのお母様も、あなたをずっと見ていてくれるわ、天国で。」  
ちよつと強気で、時々わがままで、自分の信念を曲げないこの少女が、この時ばかりはまるで母様みたいだと感じた。

「アリス、ありがとう。」

お参りを済ませて、お墓を後にして歩きだした頃にはすっかり夕方だった。見知らぬ街をあてもなく歩きながら、僕はアリスにお礼を言いたくなって、素直に口にした。

「私は別に何もしてないわよ。全部あなたの意思が運命を切り開いてきてるのよ？」

「そうだったとしても、その勇気を与えてくれるのはやっぱりアリスだよ。今最高にいい気分なんだ!!」

「そうなの？でもせめて今夜どうするか決まらないと私は落ち着かない気分だけど？」

確かにアリスの言うように、僕らは日本ではただの旅人だ。宿なんなんなり探さないといけないのだけれど、もうほとんど夜だと言うのにまだ今日の宿すら見つかっていない。

「さすがの私も墓地以外の場所はあまりわからないし。」

そうなのだ。僕の家族は僕が生まれた時から外国暮らしで、母様が生きていた頃に観光で数回と、母様の墓地の件でしか日本は来たことなく、正直ここがどこだかもよくわからない。

ポツリ。

「あ、雨。」

空気がなんとなく湿ってきたような気はしていたけれど、ついに雨が降り出した。

「レイン、走りましょう」

「えっ、あ、うん」

言うが早いか、アリスは僕の手をとって、走りだす。

アリスと手を握るのは二回目なのに、なんでかドキドキしてしまう。一度目はそんなドキドキとは無縁の感情しか出てこなかったのに。

「レイン、あそこなら雨宿りできそうよ！」

少し走ってアリスが見つけたそこは、日本の神様のいる場所、すなわち神社だった。

キリスト教の僕が本当なら入ってはいけない場所なのかもしれないけれど、今は雨宿りするのが先決だ。滞在場所も確定していない状態で、風邪を引いたらやっかいだ。

「大丈夫？寒くない？」

神社の屋根のある場所に着くなり、アリスはそう訊ねてきた。

「僕は平気、それよりアリスも服が…」

アリスのワンピースドレスがすっかり雨を吸ってびしょ濡れだった。

僕は鞆の中からタオルを出すと、アリスの髪や服を拭いた。

「私はいいから自分を拭きなさいよ。私は人形だし、別に濡れたって風邪なんか引かないわよ。」

「でも寒そうだ。」

風邪を引かなくても、濡れたら寒い筈だ。その身一つのアリスは

こんなとき濡れた髪を拭くものさえない。

「まったく、あなたって子は…」

「え、何？」

雨音にかき消されたのか、僕はアリスの言葉を聞き取れず訊き返す。

「ううん、なんでもないわ。」

でもアリスは結局なんて言ったのか、教えてくれなかった。

「でも、私あなたのそういうところすきよ。」

アリスはそう言うと、軽く僕の頬にキスをした。

「アリス…」

「私が人間化できるのはね、もともと特別な人形だからだけど、それだけじゃ人間の姿になんてなれないのよ？」

綺麗な笑顔を浮かべながらアリスはそう話します。

「レインが私を必要としてくれたから、レインが私の声を望んだから、私が今ここにいるの。あなたが私にいのちを与えたの」

「え、ぼ…僕…!？」

「そう、あなたの心が私を望んだから、私はあなたと話せる。」

アリスは僕の胸に自分の手を置いて、囁くようにそう言った。

「そして、私がああなたの幸せを願ったから。」

それが自分がここにいる理由だと。そう言いたかったのだろう。

強い意思同士が、僕とアリスを惹き合わせた？

「きつと私のいのちは、あなたの命の長さよりも短いとは思う。私のいのちね、時計仕掛けなんだって。けれど、私の終りが来るときまでは、そばに居させて？ …愛してるわ、レイン。」

そしてアリスは再び僕に口づけをした。今度は頬じゃなく、唇に。

唇を通して伝わってくるアリスのぬくもりが、アリスの“いのち”を感じさせる。

アリスが人形だということなど、忘れてしまいたくなる。

アリスのいのちが僕らよりずっと短いことなど、考えたくもない。

僕らはずっと一緒だ。たとえこの先何があるうと。

+++++

「雨、止まないね。」

もう身体は睡眠を求めているのか、僕は瞼を閉じたまま、アリスに話しかけた。

最初よりは幾分雨足は弱まったとは言え、雨が降り続けていることに変わりはなかったが、この小さな、半屋内みたいな場所は意外とあたたかく、僕らはここで一夜を明かすことに決めた。向こうの空港を出る前に買っておいたブランケットが役に立つ。二人で入るには小さかったけれど、アリスと身を寄せ合って座ればそれなりに睡眠は取れそうだ。

「そうね、でも、私こういふしと降る雨は嫌いじゃないわ。優しい雨という感じよね。」

「うん、僕も。だって自分の本当の名前を思い出すから。」

「本当の名前？」

これはアリスも知らないだろう。

アリスが我が家に来る前に、母様から聞いた話で、僕には日本人としての名前があるということだった。

ただ、僕を父親の祖国で育てると決まって、レインと名付けられたけれど。

「なんていうの？あなたの本当の名前。」

アリスも瞳を閉じたまま、聞き返す。

「ユウだよ。優しい雨って書くんだ。」

アリスに初めて教える、僕の宝物。これは僕と母様を繋げる、大切な名前だ。

「ユウ…?」

「うん、優雨」

「素敵な名前ね。これからは優雨って呼んでもいいかしら?」

「うん、明日目覚めても、忘れないでいてね。」

「もちろん、忘れたりしないわ。」

「約束だよ?」

「ん、約束。」

ブランケットの中で握った手を、もう一度強く握り返す。

ね、神様。

人間と人形は相容れない存在ですか? 愛し合うことは罪ですか?

問いかけてみても答えなんてかえってこない。

ただ静寂があるだけ。

たとえ罪だったとしても、僕らは出会ってしまった。

交差する筈のない僕らだったとしても、もう世界は交差した。

愛しい人は目の前で笑ってくれる。

アリスは確かにここに存在している。

僕はそれだけでいい。

明日はどうなるかわからないけれど、僕はアリスと一緒になら、強くなれる気がするから。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0071h/>

---

Blue Eyes Marionette

2010年10月8日14時20分発行